

毛利元次「遠石記」訳注稿

*谷本 圭司

Translation and annotation (draft) of Mototsugu Mouri (毛利元次) "Toishi no Ki (遠石記)"

Keiji, TANIMOTO

【解説】

・本稿は、徳山高専におけるの四年次選択科目の講義用資料として、作成したものである。

・「遠石記」は、宝永三年刊の『徳山名勝』に収録の漢文で書かれた文章で、徳山藩第三代藩主の毛利元次が自ら記した、遠石八幡宮を取り巻く佳景とその祭礼の賑やかさを称賛する文章であり、宝永二（一七〇四）年八月に遠石八幡宮に奉納されている。

・本文は、周南市立図書館のWEBサイトの、郷土資料ギャラリー、中央図書館所蔵画類に『徳山名勝』（見開き写真版 全二十四ページ）として公開されているものに基づき、『徳山市史料』全三冊の、上冊六六三ページ下～六六四ページ上、下冊四〇八ページに翻刻されているものを参照した。なお、今回の訳注にあたって、周南市中央図書館において原本を拝見することができたので、写真版では読みづらかったルビや傍訓を正確に確認できた。この場を借りて感謝したい。

・原文の入力できない漢字については、（雨／云）（↓雲）、（衣／甫）（↓補）のように表してある。

・内容に対応して、大まかではあるが段落分けを行ったが、厳密なものではなく理解に資するためである。

・書き下し文については、もともとの本文に記された訓点に従い、修正、補完は最小限にし、通釈に意を注いだ。

・通釈は、徳山高専の学生（四、五年生）を対象に、努めて平易を心が

けて作成したつもりであるが、安易な説明に傾きすぎたきらいもあり、また屋上屋を重ねるがごとき部分もないとは言えないと感じている。諸賢のご教示をいただければ、幸いに思う。

・注については、煩雑にわたることを避け、記が書かれた当時の漢文を学ぶ者にとって、重要であったと推測される文献に範囲を絞って用例を挙げた。それ以外の例を引用する場合は、「用例としては」と記してから挙げてある。ただし、類書等によって得られたであろう語彙の知識についての調査は、やや不徹底であることは否めない。今後、より詳細な検討を行いたいと考えている。また、『徳山市史料』全三冊に収録された、享保～寛延年間の『地下上申』、及び、河合裕『藩史』等に見える関連の記述を若干加えた。

・なお、『徳山市史料』第九編「社寺沿革」の「五 遠石村社由来 1 遠石八幡宮」の項（下冊 五七～七一ページ）には、『防長寺社由来』には記載されていない貴重な資料が多く翻刻収録されており、「遠石記」作成当時の伝承、祭礼についての重要な知見を得られた。

【本文】

遠石記

防州都濃郡徳山莊八幡遠石別宮所祭之垂跡同宇佐、指諭神社啓蒙之周防朝倉八幡也。

惟時俯以、尊崇之隴阜逶迤、前磴磬石、攀躋、晋如恂恂拝稽首、顯然仰如神在、超如回瞻、石工彫磨植于燈籠若干基。飛閣流趨東西、面榜揭往往、樓高架（竹／虚）業維縱。西石崖數尺強、松風颯颯颺葉點塵、春朝秋夕自清無匈匈、淡蕩靜、同琴韻奏、蕭条響雜、聲流而滌灌俗耳、澆胸懷矣。華表當對大島、攢峰倒嶺岐巍峩、峻嶒如削如染、長脩容與若屏障、鳥啖如篋篋塤塤鳴似祝誦。南靈寥寂禱（衣／眇）無疆度、所謂海氣昏昏水拍天、扁舟箇箇浮、而如繫于蒙籠之樹梢者也。張帆得風濤之便利、如今過目前而魯何津。碧澗風颺有戲魚鱗浪、有四時噴雪、有石間散花。鯨浦鷗洲、曝腥網於夕曛、燐漁火於櫛浜。西者青松綿綿纍纍、

擬九里松、形容松葉之芥、如鉸。奎躡于仙島黒髪嶼大津金崎西南、加復大小之嶠最頂兀起焉、幾稠人乎爰來逸遊不足日、魯陽之戈話誰昔哉矣。

至年年中秋之望祭於神、昇輿移別壇、輿前射禮揖讓行神事、觀者如堵。望後算日程十有五日、市廛在沙灣比如櫛。有監市之所司、嚴備仗衛、經緯容目瞳廻旋見督。萬商淵巨千財貨山積、貿易人蜂聚蟻同、謹呼窮日力息。俳優鋪戲劇之場、雜選灌叢星離還家兮、彎橋在市井中、跨兩岸、憧憧躡躡矣。

天鍾秀美于茲、環抱啓景乎神封。丹青雖景想於潤色、安逼真哉。登臨萬頃搖、有聲之画無所著筆、紙生毛、徒然口囁嚅嗟歎。

寶永二龍集乙酉八月 江元次誌

【訓読文】

遠石の記

防州 都濃の郡 徳山の莊 八幡遠石別宮の祭る所の垂跡は、宇佐に同じ。指諭す、神社啓蒙の周防朝倉の八幡なり。

惟れ時に俯して以（おも）うに、尊崇の隴阜 逶迤として、前磴 石を蹙（たた）み、攀躋して晋如と、恂恂として拝稽首し、顛然として仰げば神在（いま）すがごとく、超如と回瞻すれば、石工彫磨して燈籠若干基を植つ。飛閣 東西に流趨して、画榜 往往に掲ぐ。樓 高く架して（竹／虚）業と維れ攢つ。西は石崖 數尺強、松風 颯颯颯颯として葉は塵を点ず。春の朝 秋の夕を自ら清くして匈匈たること無し。淡蕩として静かに、琴韻の奏するに同じ。蕭条として響き雜り、聲 流れて俗耳を滌灌し、胸懷を澆（そそ）ぐ。華表は大島に当対し、攢峰 倒嶺 岐嶷 峴嶮たり。峻嶒として削るが如く染むるが如く、長脩容与と屏障の若く、鳥は啖（さえず）りて筮篔簹の如く、鳩は鳴きて祝誦するに似たり。

南は靈寥緜に標（衣／眇）として疆度 無く、所謂 海気昏昏として水天を拍ち、扁舟（へんしゅう） 箇箇浮びて、蒙籠の樹梢に繋がるが如しという者なり。張帆 風濤の便利を得て、如今 目前を過ぎて何れの津に罌（みなどせ）ん。碧澗 風歟（ふ）きて、有るは魚鱗の浪に戯れ、有

るは四時 雪を噴き、有るは石間 花を散らす。鯨浦 鷗州 腥網を夕曛に曝し、漁火を櫛浜に燭（もや）し、西は青松 綿綿纍纍として、九里松に擬す。松葉の斉しきを形容すれば、鉸するが如し。仙島、黒髪嶼、大津、金崎の西南に奎躡し、加復（しかのみならず）、大小の嶠 最頂兀起す。幾く稠人か爰（ここ）に來て逸遊 日をしも足らず、魯陽の戈 誰昔（そのかみ）を話（かた）るかな。

年年 中秋の望に至りて神を祭るに、昇輿して別壇に移し、輿前射禮揖讓して神事を行う。觀る者 堵の如し。望の後 日程を算ること十有五日、市廛 沙灣に在り、比して櫛の如し。監市の所司有り、嚴に仗衛を備えて、經緯 目瞳を容て廻旋見督す。萬商の淵 巨千財貨 山のごとくに積み、貿易の人 蜂のごとくに聚り蟻のごとくに同（あつま）り、謹呼 日力を窮めて息む。俳優 戲劇の場を鋪き、雜選（ざつとう）と灌叢（かんそう）と星のごとくに離れ家に還るに、彎橋 市井の中に在り、兩岸に跨りて憧憧躡躡たり。

天 秀美を茲に鍾め、環抱して景を神封に啓く、丹青 景想を潤色すと雖も、安くんぞ真に逼らんや。登臨すれば萬頃 搖れて 有聲の画 筆に著す所無し、紙 毛を生ず、徒然として口囁嚅嗟歎す。

寶永二龍集乙酉八月 江元次 誌す

【通釈】

遠石の記

周防国 都濃郡 徳山の莊にある八幡遠石別宮の祀り申しあげる神々は、宇佐神宮（の祀り申しあげる神々）と同じであり、（かの白井宗因の著作）『神社啓蒙』に教え示す「周防朝倉の八幡」である。

さて、今、（わたくし元次が）謹み伏して思うに、崇め奉る高き丘は長くうねり、登っていく階段は 石を敷き詰めてあって、（その石段を）登って進んでゆくと、穏やかで恭しい様子になり拝稽首の礼をするかのよう。敬い慕う思いで仰ぎ見ると、まさしく神のましますところと感ぜられ、歩みを止めて振り返ると、石工たちが彫刻し磨きあげた石灯籠がい

くつか置かれている。高閣は東西に水の流れゆくかに広がり、絵画に飾られた扁額があちこちに掲げられ、楼の上に高く渡された鐘懸けが聳えている。(社殿の)西側は石の壁が数尺余りの高さ、松林に吹く風のさつと(吹き過ぎていく音は)清々しく涼やかに葉は汚れを覆い消す。春の朝に(朝日を眺める時)秋の夕に(夕月を眺める時)、自然に清らか(な響きを立てるの)で騒々しさはない。(その音は)のどかに静かに、古琴の奏でられるにも等しい。四方へと広がって響きは絡み合い、その音は流れて世俗の垢にまみれた耳を洗い清め、胸のうちを浄めてくれる。華表(＝鳥居)は大島に真つ向から向き合い、(その大島の)密集した山の峰、海面に逆さまに映る嶺は、険しく傾きせまって、ひととき高く聳え立ち、削られたように(切り立ち)染められたように(青々と)、長く遠くうねって屏風のようにあり、鳥のさえずりはあたかも竖琴や土笛、竹笛のように響き、鳩の鳴き声は祝詞を唱えるかのように聞こえてくる。

南(に広がる海)は遙か彼方に広がり遠くは霞んで境界が見えず、いわゆる海の気は暗くたちこめ波は天の果てをたたくという様子で、小舟は一つ一つ浮んで、鬱蒼と茂る樹々の梢に繋がれたかのようなのである。(小舟の)風をはらんだ帆は風波の助けを得て、いま目の前を過ぎて(行くが)、何処の港に停泊するのであるか。青海原に風が吹くと、あるいは魚の鱗がきらきらと波に戯れるかのように、あるいは四季を通じて雪を噴くかのように(に白く激しく波立ち)、あるいは石の間から流れがあふれほとばしって花を散らすかのように、(目を近くに向けると)鯨の寄る浦、鷗のいる浜では、なまぐさい魚網を夕暮の残光にあてて乾かし、漁火を櫛ヶ浜に燃やし(輝かせ)ている。西(をながめるとそこ)には青々とし(て生い繁つ)た松が途切れることなく続いていて、(かの西湖の名勝の一つ)九里の松にもなぞらえられ、(その)松葉の均しく整ったさまを表せば、缺で剪定したかのよう。仙島、黒髪島、大津島、金崎が西から南へとまたにかけて連なり、そればかりではなく、さらに加えて、大小の山々が力強く高く隆起している。どれほど多くの人がこの地に来て気ま

まに遊んで一日などとても時間が足らず、魯陽の戈を手に(太陽を逆戻りさせて)、その昔のことを語ることであろうか。

毎年 中秋の望月になると神を祭り申し上げ、神輿を担いで別壇に移し、その神輿の前で射の試合を揖讓の礼もゆかしく神事として執り行い、(それを見るために)大勢の見物人が集まって垣をめぐらしたかのようなになる。(かくして)望祭の後には日数を数えること十五日の間、湾曲した砂浜に市が開かれて店が建ち、びっしりと並んで櫛の歯のようである。売買を監督する役人の長官がおり、厳めしくも杖を持った衛兵を配備し、秩序立てて治めようと、瞳に(様子を)映してぐるぐると巡回し監督する。多くの人と物が集まり、おびただしい財貨が山のように積み上がり、売り買いの人々は、声をぶつけ合って蜂や蟻のように群がり集まり、やかましく叫び合う声は一日を生きる力を使い切って(ようやく)休息しておさまる。役者たちは芝居小屋を開き、人々が行きつ戻りつ混み合い、集まり合い、(そして)夜空の星のように多くの人々が家に帰っていく、(その途中に)反り橋が遠石の町中にあり、その兩岸にわたって人の往来は途切れることなく、もたもたと歩いている。

天はすぐれて美しいものをこの地に集め、(その美しきもので)ぐるりと取り囲んで、この景勝を神のましますこの地にひらかれた。画工たちがこの風景を慕って潤色を施したとて、どうして真に迫ることなどできようか。この高みに登って海を見渡せば、どこまでも広がる青海原が揺らめき、たとえ、詩が声を持つ絵であろうとも文字で表現できるものは到底無いし、紙は毛を生やして筆跡など消えてしまう。ただただぼんやりとして言葉を発しようとしても何も言えず、感嘆するばかりである。

宝永二(一七〇四)年 乙酉(きのととり) 八月 江元次誌(しる)す

【注】

○遠石記

現在の周南市遠石にある遠石八幡宮についての記。この一文は、文末

に記されているように宝永二（一七〇四）年八月に書きあげられ、遠石八幡宮に奉納された。河合裕『藩史』巻之五 神仏社寺之部の「同（Ⅱ）遠石八幡宮之事」御寄附物之事」の項に「宝永二年乙酉八月遠石之記御奉納。其文二曰、「とあつて全文が引用されている（『徳山市史料』上冊六六三ページ下〜六六四ページ上）。

○八幡遠石別宮

遠石八幡宮のこと。

○垂跡

垂迹に同じ。神々のこと。仏や菩薩の本体を「本地」といい、その本体を衆生を救うために様々な姿に現すことを「垂迹」という。日本では、日本の様々な神々は、本地である仏や菩薩が垂迹として現れたものだとする「本地垂迹説」が、平安時代に成立した。

○指論

「はつきりと教え示すこと。」

○神社啓蒙

書名。白井宗因の著。寛文七（一六六七）年刊。白井宗因は、大阪において三代続く医者であったが、国学を修め、『神社便覧』・『神社啓蒙』を著した。『神社啓蒙』の跋文を見るに、それぞれの神の依るところを明らかにし、人々に崇める理由を知らしめて邪説に惑わされぬことをねらいとして書かれたものであるという。

○周防朝倉八幡

白井宗因『神社啓蒙』巻六に「○朝倉八幡 在周防国朝倉、所祭之垂跡同宇佐。 註式曰、人皇五十六代清和天皇貞觀元年、立行宮勸請之。」とある。

『神社啓蒙』は、全七巻。寛文七年序、同十年刊の、国立国会図書館デジタルコレクションとしてインターネット公開されているものに基づいた。 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/2556088?tocOpen=1>

なお、遠石八幡宮所蔵の「防州都濃郡八幡遠石別宮之縁起」が、『徳山

市史料』下冊六四頁下〜六五頁下にかけて翻刻されて収載されており、「爰（ここ）に防州都濃郡朝倉「中比（なかごろ）野上ト云、今改徳山ト」乃磯辺に一つの大石有、其の根深ふして金輪際より生出でたり。推古天皇三十年乃春に至て、此石忽然として光明赫然たり、諸人驚動して窺見る所に、其傍人卒（にわか）に戦慄して曰、我は是宇佐八幡なり、此地に跡を垂て国土を守らんかために今又爰に顕る、噫、遠石なるかな、と。神託 新なりしかは、里民 信心肝に銘し、参詣する者 断（たえ）る時なし。」とある。以上の引用は読みやすさに配慮して、句読点を加え、（ ）内に読みを加えた。また、「」内は原文の割注である。
*以上、遠石八幡宮の由緒を簡潔に述べる。

○尊崇

崇め奉ること。漢 揚雄「甘泉賦」(『文選』巻七)に「於是欽柴宗祈、燎薰皇天、臯搖泰壹。」とあり、欽柴宗祈に対して李善は「恭敬燔柴、尊崇所祈也。『尚書』曰、至于岱宗柴。」、搖泰壹については、「張晏曰、搖泰一、皆神名。善曰、搖與遙同。」と注しており、神を尊び崇める例として、これを挙げておく。

○隴阜

高い丘。ここでは、遠石八幡宮の建つ丘を指す。用例としては、南朝 梁 陶弘景『真誥』巻一一に「非直去如板也、亦可是登隴阜之上、則於天為下耳」とある。

○透迤

大きく曲がるさま。ここは、八幡宮への参道が折れ曲がっていることをいう。漢 揚雄「甘泉賦」(『文選』巻七)に「梁弱水之淵澗兮、躡不周之透迤。」とあり、李善の注に「迤、音移。」呂向の注に「透迤、長曲貌。」とある。

○前磴

神前への石段。「磴」は、磴道（Ⅱ石の道）のこと。清水吉康『大日本

名所図録・山口県之部』大成館明3137にある「遠石八幡宮境内之圖」を見るに、神前に向かつて丘を登る石段が描かれているので、ここでは石段と解釈する。南朝宋 謝靈運「嶺表賦」に「顧後路之傾巘、眺前磴之絶岸、看朝雲之抱岫、聽夕流之注澗」（『藝文類聚』卷八）とある。

なお、清水吉康『大日本名所図録 山口県之部』大成館明3137は、国立国会図書館デジタルコレクションとしてインターネット公開されているものを参照した。 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/762206>

○整石

石を積み上げること。唐 白居易「池上即事」詩に「行尋整石引新泉、坐看修橋補釣船。」とある。

○晋如

進みゆくこと。原文の傍訓に「ス、三」。「し如」という形は、「し然」というのに等しい。『周易』晋卦に「初六。晋如、摧如、貞吉。罔孚、裕、無咎。處順之初、應明之始、明順之德、於斯將隆。進明退順、不失其正、故曰、晋如、摧如、貞吉也。」とある。

○恂恂

もの静かで恭しいさま。『論語』郷党に「孔子於郷党、恂恂如也。」とある。

○拝稽首

目上の者に対して行う礼で、手を合わせたところまで頭を下げ、更に地に頭がつくまで深々と下げること。『書経』舜典「禹拜稽首、讓于稷、契與臯陶。」孔安国の伝に「稽首、首至地。」とある。

○顛然仰

「顛然」は、敬い慕うさま。『詩経』大雅「卷阿」に「顛顛印印、如圭如璋、令聞令望。」毛伝に「顛顛、温貌。印印、盛貌。」鄭箋に「王有賢臣、與之以禮義相切磋、體貌則顛顛然敬順、志氣則印印然高朗。」とあるが、「仰」とのつながりを考慮するに、劉琨「勸進表」（『文選』卷二七）に「蒼生顛然、莫不欣戴。」李善は『淮南子』俶真訓の「聖人、呼吸陰陽

之氣、而羣生、莫不喁喁然仰其德以和順。」（筆者追記 「喁」＝「顛」。今本『淮南子』は、「顛」に作る）を引いて注し、呂延済は「顛然、仰德貌」と注するのに基づく表現であろう。

○如神在

ほんとうに神がいるように感じること。また、神がいるようにふるまうこと。『論語』八佾篇に「祭如在、祭神如神在。」とある。

○超如

進もうとしてためらうさま。原文の傍訓に「タチヤスラヒ」。『説文解字』に「超、越超也。」とある。「越超」は、「越超」、「次且」とも記され、『易経』夬卦に「九四、臀無膚、其行次且。」孔穎達の疏に「次且、行不前進也。」とある。

○回瞻

振り返って眺めること。唐 楊思玄「奉和聖制過温湯」詩に「迴瞻漢章闕、佳氣滿宸居。」とある。

○石工

石を切つて、彫刻を施し磨き上げる職人。『禮記』曲禮下に「天子之六工、曰、土工、金工、石工、木工、獸工、草工。」孔穎達の疏に「玉及磬同出於石、故謂石工也。」とある。

○彫磨

彫刻し磨き上げること。宋 蘇轍「次韵毛君山房遣興」詩に「頑鈍終何取、彫磨豈復加。」とある。

○植

立てる、置くの意。『論語』微子篇に「植其杖而芸。」とあり、伊藤仁斎『論語古義』は、「植、倚立也。」、荻生徂徠『論語徴』は「按、蔡邕石经、植作置。古字通用耳。」と注する。

○燈籠

「遠石八幡宮境内之圖」（前掲「前磴」の注を参照）には、参道に幾つもの石燈籠が置かれているのが見える。河合裕『藩史』卷五 神仏社寺之

部には、「元禄十一（一六九八）年戊寅八月十四日石灯籠二基御寄附」の記載がある（『徳山市史料』下冊六六四ページ上）。

○飛閣

高閣のこと。三國魏 曹植「贈丁儀」詩に「凝霜依玉除、清風飄飛閣。」とある。

○流趨

流れゆくこと。『焦氏易林』に「訟之」比。水流趨下、欲至東海。」とある。

○画榜

絵画に飾られた扁額。用例としては、元余闕「送普原理之南台御史兼簡察士安」詩に「霜署起南天、雲霄畫榜懸。」と見える。

○〈竹／虚〉業維樅

〈竹／虚〉は、たけかんむりに、虚。音は「キョ」。「虚」に同じ。原文の「〈竹／虚〉業」の箇所には、訓注「カ子カケ（かねかけ）」が傍記されているので、そのままを通釈に用いる。「虚」は、鐘懸けの両端に立てる柱のこと。「業」は、鐘懸けの横木の上に掲げる、彫刻を施した大きな飾り板のこと。「樅」は、「業」の上に彩色し、鐘を懸けるための刻みを鋸の歯のように入れた部分が、牙のようになっていて部分のことで、それが切り立っている様子をいう。『詩経』大雅「靈臺」に「虞業維樅、賁鼓維鏞」とあり、毛伝に「植者曰虞、横者曰枸。業、大版也。樅、崇牙也。」鄭箋に「虚也、枸也、所以懸鍾鼓也。設大版於上、刻畫以為飾。」孔穎達の疏に「言崇牙之状、樅樅然。」とある。

○石崖

石の壁のこと。元結「大唐中興頌」に「湘江東西、中直浯溪、石崖天齊。」（『古文真宝 後集』所収）とある。

○松風

松林に吹く風のこと。南朝宋 顔延之の「拜陵廟作」詩に「松風遵路急、山煙冒壠生。」（『文選』卷二七）とある。

○颯颯

風がさつとふく音の形容。「颯」の音は「サツ」。『楚辞』九歌 山鬼に「風颯颯兮木蕭蕭、思公子兮徒離憂。」とある。

○颯颯

清涼なさま。王延壽「魯靈光殿賦」に「鴻燿焜以燻閭、颯蕭條而清冷。」、李善注に「颯蕭條、清涼之貌。」（『文選』卷一一）とある。

○葉點塵

この部分は、難しい。「點塵」の一語ならば、仏教語で「恒沙」と対になる、「数え切れないほど多い」の意で、この部分の意味として不自然さはない。しかし、原文に、レ点と送り仮名が記され、「塵を點ず」と読ませているため「點塵」の意味合いにはとれない。個々の字義においてこの部分に適合しそうなものは、「塵」は「汚れ」、「點」は「塗りつぶして消す」であるが、根拠となる表現を見出せないで、付会の誹りを免れないと考える。ただし、他に適切な解釈をできないので、ひとまず、個々の字義によって「汚れを覆い消す」と解釈しておく。

○春朝秋夕

春の朝に朝日を眺め、秋の夕に夕月を眺めること。漢 賈誼『新書』保傅に「三代之禮。天子春朝朝日、秋暮夕月、所以明有敬也。」とある。

○匈匈

乱れて騒がしいさま。『史記』卷 項羽本紀に「項王謂漢王曰、天下匈匈數歲者、徒以吾兩人耳。」とある。

○淡蕩

のびやかで穏やかなさま。唐 陳子昂「與東方左史虬修竹篇」詩に「春風正淡蕩、白露已清冷。」とある。

○琴韻

古琴の音。唐 許渾「重遊飛泉觀題宿龍池」詩に「松葉正秋琴韻響、菱花初曉鏡光寒。」（『三体詩』所収）とある。

○蕭条

清涼なさま。前記「魍魎」の注を参照。

○響雜

響きがまじりあうこと。用例としては、南朝陳後主の「夜亭度雁賦」に「行雜響時亂、響雜行時散。」(『初学記』卷二一)とある。

○滌灌

「滌」も「灌」も、水で洗うこと。「灌滌」に同じ。ここは洗い清めるの意に解釈する。

○俗耳

俗世間のことを聞きなれた耳のこと。唐韓愈の「縣齋讀書」詩に「哀狄醒俗耳、清泉潔塵襟。」とある。

○澆胸懷矣

「澆」は、洗い流すこと。「胸懷」は、心の中の思い。『世説新語』任誕篇に「阮籍胸中壘塊、故須酒澆之。」とある。

○華表

ここでは、鳥居のこと。「華表」は、宮殿などの参道の入り口に置かれた一對の柱のことであるが、日本では「華表」を鳥居と訳している。

○當對

對等に向き合うの意。『世説新語』文學篇「支道林初從東出、住東安寺中。王長史宿構精理、竝撰其才藻、往與支語、不大當對。」とある。

○大島

現在の山口県周南市大島。現在は島ではなく地続きとなっている。

○攢峰

密集した山の峰。南朝齊孔稚珪「北山移文」に「於是南嶽獻嘲、北嶺騰笑、列壑爭譏、攢峰竦誚。」(『文選』卷四三)。また、『古文真宝』後集)とある。

○倒嶺

海面に逆さまに映る嶺のこと。晋孫綽「遊天台山賦」に「或倒景於重溟、或匿峰於千嶺。」とあり、李善の注に「山臨水而影倒、故曰倒景也。」

李周翰の注に「景、影。重、深。溟、海。匿、藏也。直上孤立曰峯、平高而長曰嶺。言此山俯以臨深海、山影倒在水中、其峻峯遠在嶺後。故為千嶺所蔽。」とある(『文選』卷一一)

○岐

険しく傾きせまるさま。「岐嶠」の意。晋陸機「謝平原内史表」に「思所以獲免、陰蒙避迴、岐嶠自列。」、李善注に「言密自蒙蔽、避迴罔黨、岐嶠艱阻、得自申列也。」、呂延濟注に「岐嶠、傾側也。」(『文選』卷三七)とある。

○巍

高くそびえるさま。漢張衡「西京賦」に「疏龍首以抗殿、狀巍巍以岌業。」とある。

○峴嶮

「峴」の音は「ゴウ」、「嶮」の音は「コウ」。山の高く険しいさま。「嶮峴」に同じ。張衡「南都賦」に「其山則嶮峴嶮嶮、嶮嶮峴峴」とあり、李善の注に「嶮峴嶮嶮、山石高峻之貌。」(『文選』卷四)とある。

○峻嶮

険しく聳え立つさま。南朝梁何遜「渡連圻」詩二首其一に「懸崖抱奇嶮。絕壁駕峻嶮。」とある。

○長脩

「脩長」に同じ。班固「幽通賦」に「道脩長而世短兮、復冥默而不周。」(『文選』卷一四)とあり、李善注に「言天道長遠。」とある。

○容與

原文の傍訓に「ウ子リ(うねり)」。『楚辭』九章「涉江」に「船容與而不進兮、淹回水而凝滯。」とある。

○屏障

屏風のこと。唐白居易「重題別東樓」詩に「湖卷衣裳白重疊、山張屏障綠參差。」とある。

○暎

鳥が鳴くこと。『玉篇』に「唳、鳥鳴也」とある。

○箜篌

箜篌は、古代の豎琴。弦の数は、二十三。正倉院に断片として伝わっている。『旧唐書』卷二九 音楽志に「豎箜篌、胡樂也。漢靈帝好之。」とある。

○埴篋

「埴篋」に同じ。「埴」(「埴」)は卵形の陶器笛で、「篋」は竹製の笛。『詩経』小雅「何人斯」に「伯氏吹埴、仲氏吹篋。」とあり、毛伝に「土曰埴、竹曰篋。」鄭箋に「伯仲、喻兄弟也。我與女恩如兄弟、其相應和如埴篋、以言俱爲王臣、宜相親愛。」とある。また王粲「贈士孫文始」詩に「和通篋埴、比德車輔。」とあり、李善の注に「毛萇曰、土曰埴、竹曰篋。」(『文選』卷二二)とある。

○祝誦

祝詞の意に解釈する。「誦」は、朗誦することばのこと。『詩経』大雅「烝民」に「吉甫作誦、穆如清風。」鄭箋に「吉甫作此工歌之誦、其調和人之心性如清風之養萬物然。」とある。

*以上、遠石八幡宮とその周囲の景の素晴らしさを述べる。

○霏寥窈

原文の傍訓に「ハルカニ フカク」。霏の音は「オウ」、寥の音は「ギョウ」、窈の音は「ソウ」。王延壽「魯靈光殿賦」に「隱陰夏以中處、霏寥窈以崢嶸。」李善注に「霏寥窈、崢嶸、皆幽深之貌。霏、烏宏切。寥、魚天切。窈、音巢。」(『文選』卷十一)とある。

○標(衣/眇)

原文の傍訓に「ホノカニ」。(衣/眇)は、ころもへんに眇。この文字は、異体字の辞書類には見えない。以下に挙げる木華「海賦」に「群仙標眇」(『文選』卷十二)とあるのに基づき、上の「標」に合わせて衣偏を加えたのであろうか。意味は、同音の豊韻語、「瞽眇」「縹縹」等と同

じく、果てしなく遠くかすかにしか見えないさまであろう。王延壽「魯靈光殿賦」に「忽瞽眇以響像、若鬼神之髣髴。」李善注に「瞽眇、視不明之貌。說文曰、瞽、睽也。廣雅曰、眇、莫也。」、呂向の注に「瞽眇、猶依稀也。言此形象依稀髣髴若有其形聲。」(『文選』卷十一)とある。また、木華「海賦」に「群仙標眇、餐玉清涯。」李善注に「標眇、遠視之貌。魯靈光殿賦曰、忽瞽眇以響像。」(『文選』卷十二)とある。

○疆度

境界をはかるの意。『漢書』卷八七上 揚雄伝上に載せる揚雄の「甘泉賦」に「直嶢嶢以造天兮、厥高慶而不可虜疆度」とあり、顔師古の注に「疆、境也。度、量也。」とある。なお、『文選』卷七の「甘泉賦」は「厥高慶而不可乎彌度。」に作り、李善は『爾雅』を引いて「彌、終也」と注し、続けて「言高不可終竟而度量也。彌、或爲疆。」と注する。

○海気昏昏水拍天

海の気は暗くたちこめて波は天の果てを打つ。「昏昏」は暗いさま。唐韓愈「題臨瀛寺」詩に「潮陽未到吾能說、海気昏昏水拍天。」とある。

○扁舟箇箇浮、而如繫于蒙籠之樹梢者也

海原を鬱蒼と茂る森林の樹海に見立て、ぽつぽつと海に浮かぶ小舟を木の枝に繋がれたようだと言える表現。「蒙籠」は、晋郭璞「江賦」に「石帆蒙籠以蓋嶼、萍實時出而漂泳。」(『文選』卷二二)とある。

○張帆

風をはらんだ帆のこと。唐李白「贈友人三首其二」詩に「鑿井當及泉、張帆當濟川。」とある。

○得風濤之便利

風波に助けられること。唐崔塗「鸚鵡洲即事」詩に「何人正得風濤便、一點輕帆萬里回。」とある。

○如今

いま、現在の意。『史記』卷七 項羽本紀に「樊噲曰、大行不顧細謹、大禮不辭小讓。如今人方爲刀俎、我爲魚肉、何辭爲。」とある。

○畧何津

「畧」は、「澳」に同じ。「澳」は、港湾のことであるが、下に「何れの津（＝いずこの港）」とあるので、ここは動詞に読み、入港する、あるいは（港に）停泊するの意に解釈する。「澳」が港湾の意味で使われた例として、宋 范成大『吳船錄』卷下に「江爲赤壁一磯所攖、流轉甚駛、水紋有暈、散亂開合、全如三峽。郡議欲開澳以歸宿客舟、未決。」とあるのを挙げておく。

○碧澗

青海原のこと。「澗」は、海の意。『説文解字』に「澗、郭澗、海之別也。」

○歛

「吹」の古字。

○戯魚鱗浪

魚の鱗がきらきらと波に戯れるように見えるの意。晋 孫綽「蘭亭詩二首」其二に「鶯語吟脩竹、游鱗戲瀾濤」とある。また、宋 陸游「東門外遍歷諸園及僧院觀遊人之盛」詩に「微風蹙水魚鱗浪、薄日烘雲卵色天。」とある。

○四時噴雪

「四時」は、春夏秋冬のことで、四季をいう。ここは、「四季を通じて常に」の意に解釈する。「噴雪」は、激しい波の波頭が、連なる山々が雪を噴いたように白く見えるさま。唐 李白「橫江詞」其四に「海神來過惡風迴、浪打天門石壁開。浙江八月何如此、濤似連山噴雪來。」とある。

○石間散花

流れが石の間からあふれほとばしって花びらを散らすかのように見えるの意。晋 潘岳「秋興賦」に「泉湧湍於石間兮、菊揚芳於崖澗。」（『文選』卷一三）とあり、また、晋 左思「魏都賦」の「蘭渚莓莓、石瀨湯湯。」の劉逵注に「石瀨、湍也。水激石間、則怒成湍。」（『文選』卷六）とある。「散花」は、南朝梁 簡文帝の「應令詩」に「遠煙生兮含山勢、風散花兮

傳馨香。」とある。

○鯨浦

「鯨浦」は、鯨の寄る海辺のこと。「鯨浦」の語例として、唐 王勃「乾元殿頌序」に「天街五裂、截鯨浦而飛芒」とあるのを挙げる辞書が多いが、この例での「鯨浦」は大海の意であり、ここには合わない。『太平記』卷四に「虎伏野辺鯨寄浦なり共、あこがれぬべき心地しけれ共」とあり、『毛吹草』にも「とらふすのべにつれ、くじらよるうらにゆく」とあるのが意識にあると考えて解釈した。

○鷗洲

「鷗州」は、鷗のいる浜辺のこと。唐 韓翃「送客歸江州」詩に「客舍不離青雀舫、人家舊在白鷗洲」とある。

○曝腥網

「曝」は、日光にあてて乾かすこと。「腥」は、なまぐさいこと。「腥網」は、漁で使った魚網のこと。用例としては、宋 董嗣杲の「謝村」詩に「貧衲施茶營屋小、老漁曝網遶籬腥。」と見える。

○夕暝

夕暮に残った光をいう。南朝宋 謝靈運「晚出西射堂」詩に「曉霜楓葉丹、夕暝嵐氣陰。」（『文選』卷二二）とある。

○燐

原文のルビに「モヤス」。『史記』卷八四 屈原賈生列傳に「彌融燐以隱處兮、夫豈從螳與蛭螾。」張守節の正義に「顧野王曰、融、明也。燐、光也。」とあるので、燃やして輝くと解釈する。

○櫛浜

現在の山口県周南市櫛ヶ浜。

○綿綿纍纍

「綿綿」、「纍纍」、ともに途切れることなく続くさま。『詩経』王風「葛藟」に「緜緜葛藟、在河之滸。」とあり、毛伝に「緜緜、長不絶之貌。」とある。また、『禮記』樂記に「纍纍乎端如貫珠。」とある。

○九里松

現在の中華人民共和国浙江省杭州市西湖の北側にあった名勝。九里雲松とも言われる。唐代に杭州刺史であった袁仁敬が行春橋から靈隱寺、三天竺（上天竺寺Ⅱ法喜寺、中天竺寺Ⅱ法浄寺、下天竺寺Ⅱ法鏡寺の総称。古南天竺寺とも言う）にかけて松を植え、人々は「九里松」と呼んだと伝えられる。（「里」は、唐代では三六〇歩、メートル法では五六〇m弱。九里は、五kmほどに該当する）。明 田汝成『西湖遊覧志』卷十北山勝蹟に「九里松。唐刺史袁仁敬 守杭、植松以達靈竺、凡九里。左右各三行、每行相去八九尺、蒼翠夾道。」とある。

○齊

そろっているさま。『説文解字』に「齊、禾麦吐穗上平也。」とある。

○鉸

はさみ。ここでは、はさみで切りそろえること。唐 李賀の「五粒小松歌」に「緑波浸葉滿濃光、細束龍髯鉸刀剪」とある。

○奎蹠

またにかけること。張衡「西京賦」に「袒裼戟手、奎蹠盤桓。」とあり、薛綜の注に「奎蹠、開足也。」（『文選』卷二）とある。

○仙島

現在の山口県周南市仙島。河合裕『藩史』卷之二 御制法御勘法之部 御領内地名替之事の項に「正徳三年癸巳五月十九日弥地 夜市ニ御改、瀬島 仙島ニ御改」（正徳三年は、一七一三年。「仙島」に「センシマ」とルビ）とある。この「遠石記」は、寶永二（一七〇五）年に書かれているので、正式に改められる八年前に、すでに元次は「仙島」と呼んでいたことになる。（後の「金崎」の注を参照）

○黒髪嶼

現在の山口県周南市黒髪島。「嶼」は、小島の意。

○大津

現在の山口県周南市大津島。

○金崎

現在の山口県周南市大津島馬島金崎。『地下上申』大津島村の項に「馬島」の名は見えるが、地名としての金崎の記載はない。しかし、元次の選んだ「松屋十八景」の一つにも「金崎漁舟」とあって、「金崎」という地名を元次が意識して使っていることは明らかである。『地下上申』大津島村の大津島之内小村小名寄の項には「馬島」という地名の由来を「但往古まき馬有之たる由、其故ニか馬島と申ならハし候由申傳候事」と記す。前の「仙島」の例も含め、元次は、雅意を感じさせる名称を用いようという意識を持っていたのかもしれない。

○西南

単純に方位をいうのではなく、上の「奎蹠」に呼応して、「西から南に（かけて）」の意に解釈する。

○加復

原文のルビに「シカノミナラス」。「そうであるばかりではなく（、さらに加えて）」の意。

○嶠

山の鋭く高いさま。晋 郭璞「江賦」に「衡霍磊落以連鎖、巫廬崑魚鬼巖危勿而比嶠。」とあり、李善は『爾雅』釋山を引いて「山鋭而高曰嶠」と注する（『文選』卷二）。

○鼻肩

力を起こすさま。漢 張衡「西京賦」に「綴以二華、巨靈鼻肩、高掌遠蹠、以流河曲、厥跡猶存。」とあり、薛綜の注に「鼻肩、作力之貌也。」とある。（『文選』卷二。なお、李善注本は「鼻肩」を「鼻肩」に作るが、ここは六臣注本の和刻本『文選』に従う。和刻本『文選』は、汲古書院刊の影印本）

○兀起焉

高く聳えるさま。宋 蘇軾「健為王氏書樓」詩に「樹林幽翠滿山谷、樓觀突兀起江濱。」とある。

○稠人

多くの人。『史記』卷一〇七 魏其武安侯列伝に「稠人廣眾、薦寵下輩。士亦以此多之。」とある。

○逸遊

気ままに遊ぶこと。晋 潘岳「西征賦」に「縦逸遊於角觝、絡甲乙以珠翠。」(『文選』卷一〇)とある。

○魯陽之戈

中国の戦国時代、楚の魯陽公が西に沈みかけた日を矛でさしまねいて呼び返した故事による。『淮南子』覽冥訓に「魯陽公與韓構難、戰酣日暮、援戈而擣之、日爲之反三舍。」とある。ただし、ここは晋 左思「吳都賦」に「酣酒半、八音并、歡情留、良辰征、魯陽揮戈而高麾、迴曜靈於太清、將轉西日而再中、齊既往之精誠。」とあり、劉逵注に「此言酣飲與音樂、蓋是其中半并會之際、歡情之所以留連、良辰之所以覺也。故追述魯陽迴日之意、而將轉西日於中盛之時、以適己之盛觀也。」(『文選』卷五)とあるのをふまえていると思う。

○誰昔

そのむかし。原文のルビに「ソノカミ」。「誰」は発語の辞。『詩經』陳風「墓門」に「知而不已、誰昔然矣。」とあり、鄭箋に「誰昔、昔也。」孔穎達の疏に「郭璞曰、誰、發語辭。」、朱熹集伝は「誰昔、疇昔也。」とする。

*以上、遠石八幡宮を取り巻く遠景の素晴らしさを述べる。

なお、関連する資料として、前掲の「防州都濃郡八幡遠石別宮之縁起」(『徳山市史史料』下冊六四頁下〜六五頁下)に、「和銅元年二月七日に始而宮殿を造立して八幡遠石別宮と号け奉り、神主神人野上景直 同直次 従ひ来て仕へ奉り、毎年八月十五日に祭礼を執行、其麓に市を立て、則其所を遠石村と号けたり。其靈地の佳景を謂ハ、後は青山峨峨として白雲 峯に横り、前は蒼海渺渺として 碧浪 天に翻へり、右は石壇 壁に削り、左は槐樹 枝を連ねたり。西嶺には千秋の雪を戴き、南浦には万里

の船を繫。朝には平沙に鷹陳を張、暮にハ江村に漁火を焼、清々たる月影は常燈乃光明を継、颯々たる松風は宜禰か鈴の声を添。抑 此宮ハ日本四所乃八幡にして当国の鎮守なり。信心を凝して一度此山に登る者は所願成就せすと云事なし。」とあるのを挙げておく。「遠石記」の記述と比較するに、元次が「防州都濃郡八幡遠石別宮之縁起」を知っていた可能性が高いと思うからである。

○中秋之望祭於神、昇輿移別壇、輿前射禮揖讓行神事

「中秋之望」は、旧暦八月十五日。『徳山市史史料』下冊六六ページ下〜六七ページ上に載せる「書付」に「一 当社毎歳八朔鎮齋、八月十五日祭礼、神幸射礼祭市等有之來候、其外年中行事数ヶ度有之事」とある。昇輿」は、神輿を担ぐこと。「昇」は、担ぎあげる。『説文解字』に「昇、共擧也。」とある。「別壇」は、浜の御旅所に設けられた壇。「射禮」は、神前において弓の試合をすること。「揖讓」は、手を胸の前で組み合わせ、先を譲ること。謙遜の礼。『論語』八佾篇に「子曰、君子無所爭。必也射乎、揖讓而升下。而飲。其爭也君子。」とある。

○觀者如堵

非常に多くの見物する者たちが垣根のように取り囲んでいること。『禮記』射義に「孔子射於矍相之圃、蓋觀者如堵牆。」とある。

○算日程十有五日

中秋の望祭のあと、十五日の日数を数える間の意。

○市廳

市場の店。「廳」は、店舗のこと。後の「萬商淵巨千財貨山積」の注を参照。

○沙湾

湾曲した砂浜。遠石八幡宮境内之圖」(前記「前磴」の注を参照)には参道から山陽道を横切って海に面した側に大きく張り出した埋立地らしきものが描かれている。ここで射礼が行われたのであろうが、その後には

市が開かれたのであろう。

○比如櫛

びっしりと並んでいるさま。『詩経』周頌「良耜」に「其崇如墉、其比如櫛。」とあり、毛傳に「墉、城也。」、鄭箋に「草穢既除而禾稼茂、禾稼茂而穀成熟、穀成熟而積聚多。如墉也、如櫛也、以言積之高大、且相比迫也。」とある。なお、朱熹集傳は「櫛理髮器、言密也。」と注する。

○監市之所司、

「監市」は、市の売買を監督する役人。『莊子』知北遊篇に「正獲之間於監市履豨也、每下愈況。」とある。「所司」は、役人の長のこと。

○仗衛

杖を手に監督警戒のために常駐する兵。『資治通鑑』陳宣帝太建十二年に「堅潛令賁部伍仗衛、因召公卿、謂曰、欲求富貴者宜相隨。」胡三省の注に「仗衛、執仗而宿衛之兵也。」とある。

○經緯

秩序の喩え。ここは秩序立てて治めること。『春秋左氏傳』昭公二十五年に「禮、上下之紀、天地之經緯也。」孔穎達の疏に「言禮之於天地、猶織之有經緯、得經緯相錯乃成文、如天地得禮始成就。」とある。

○容目瞳

「容」は、入れる。「目瞳」は、「瞳」のこと。『孟子』離婁上に「孟子曰、存乎人者、莫良於眸子。眸子不能掩其惡。」とあり、趙岐の注に「眸子、目瞳子也」とある。

○廻旋

何度も巡回すること。宋蘇軾「遊徑山」詩に「衆峰來自天目山、勢若駿馬奔平川。中途勒破千里足、金鞭玉鐙相回旋。」とある。

○見督

監督すること。『南齊書』卷一四州郡志上に載せる、晋何無忌「以竟陵還荊州表」に「又司州弘農、揚州松滋二郡、寄尋陽、人民雜居、宜竝見督。」とある。

○萬商淵巨千財貨山積

多くの人やものが集まり、おびただしい財貨が山のように積み上がるの意。晋左思「蜀都賦」に「市廛所會、萬商之淵。列隧百重、羅肆巨千、賄貨山積、織麗星繁。」とあり、李周翰の注に「言市廛之衆、商賈如淵、市中道。肆、鋪也。羅列百重。巨千、言多也。賄貨、財帛也。織麗、細好之物。山積星繁、衆盛貌。」(『文選』卷四)とある。

○貿易

交易のこと。『史記』卷二二九貨殖列傳に「以物相貿易、腐敗而食之貨勿留、無敢居貴。」とある。

○蜂聚蟻同

蜂のように蟻のように集まり群がること。漢馬融「長笛賦」に「踴蹶攢仄、蜂聚蟻同。」とあり、李周翰の注に「踴蹶攢仄蜂聚蟻同、並聲相擊多貌。」(『文選』卷一八)とある。

○謹呼

やかましく叫び合う声のこと。『後漢書』卷一一劉盆子伝に「盆子居長東宮、諸將日會論功、爭言謹呼、拔劍擊柱、不能相一。」とある。

○窮日力息

日の出から日没までの力を使い果たしてから休息するの意。『孟子』公孫丑下に「去、則窮日之力而後宿哉」とあり、趙岐の注に「極日力而宿。」とある。

○俳優鋪戲劇之場

「俳優」は、役者(また歌舞伎役者)。「鋪」は、「舗」の正字で、しき連ねるの意。『詩経』大雅「常武」に「鋪敦淮濱、仍執醜虜」とある。「戲劇之場」は、芝居小屋。ここは「歌舞伎役者たちが芝居小屋を開く」と解釈した。

河合裕『藩史』卷之七 雑事之部 「遠石町芝居之事」の項に「寛文四(一六六四)年甲辰八月遠石八幡宮祭市歌舞伎始、是より毎歲興行今年長州下ノ関女歌舞伎來」(『徳山市史史料』上冊七三五ページ下)とあり、

芝居小屋で上演されたのは歌舞伎であったことがわかる。それ以外に小芝居なども上演されたようであり、同書『藩史』の巻之一「公室之部」於御館遠石芝居御見物之事の項『徳山市史史料』上冊 四七九ページ上)には、元次が藩主となる前、元賢の時代の三度を含め、改易以前に以下に列挙する「御見物」が行われ、小芝居や軽業を藩主が御覧になったことがわかる。なお、理解の便をはかるため、引用列挙した本文中に西暦を書き加えた。

一 貞享四(一六八七)年丁卯八月廿一日御城御書院ニおゐて遠石芝居元賢公御見物

一 元祿二(一六八九)年己巳八月廿三日同断

一 同年九月朔日遠石小芝居軽業於御書院御庭興行、同公御覧

一 元祿四(一六九一)年辛未八月廿五日遠石芝居御書院ニ而元次公

御見物

一 元祿六(一六九三)年癸酉九月七日大芝居同月九日小芝居右同断

一 宝永六(一七〇九)年己丑十二月朔日大芝居右同断

一 正徳元(一七一)年辛卯八月十八日右同断

○雑選

原文のルビ「サツタフ」、傍訓に「ヲ、フク」。「多くの人で混雑する」、「多くの人が密集する」の意。傍訓に沿う用例は見つからないため、「往復」の意を加味して解釈した。漢揚雄「甘泉賦」に「長幼雜選以交集、士女頡頏而咸辰。」とあり、李善注に「雜選、衆多貌也」(『文選』卷七)とある。

○灌叢

原文の傍訓に「アツマリ」。晋左思「吳都賦」に「洪桃屈盤、丹桂灌叢。」とあり、劉逵注に「所在叢聚、無他雜木也。」(『文選』卷五)とある。

○星離

夜空に輝く星のように多いさま。郭璞「江賦」に「霏布餘糧、星離沙

鏡。」とあり、李善注に「霏布・星離、言眾多也。」(『文選』卷一二)とある。

○彎橋在市井中、跨兩岸

旧山陽道を遠石八幡宮の参道を右手に見ながら西へ向かうと、遠石の町を東西に分ける梅花川に橋がかかっている。橋を渡るとすぐに影向石が右手に見える。「彎橋」は、この橋のことであり、「彎」とあることから、当時は反り橋だったのであろう。

○憧憧

人の往来が途絶えることのないさま。『易経』咸卦に「九四。憧憧往来、朋従爾思」とある。

○躑躅

「躑躅」に同じ。幼い子が歩くさま、老人が歩くさまの意。ここは、家に帰る大勢の人々が混雑のために、もたもたとしか進めない様子という。『廣韻』に「躑、躑躅、小兒行兒」とある。また、唐盧仝の「自詠三首 其二」詩に「盧子躑躅也、賢愚總莫驚。」とある。

*以上、遠石八幡宮の祭事の盛大で賑やかな様子を述べる。なお、『徳山市史史料』下冊 五八ページ上に載せる奈古屋梅翁の「遠石八幡宮祭礼記」は、「遠石記」のこの部分の記述に酷似している。本来なら比較検討を加えるべきであるが、長文でもあり、紙幅の都合もあるので、いま、指摘のみにとどめておく。

○天鍾秀美于茲、

天がすぐれて美しいものをこの地に集めたの意。唐柳宗元「邕州柳中丞作馬退山茅亭記」に「蓋天鍾秀於是、不限於遐裔也。」とある。「秀美」は、すぐれて麗しいもの。宋蘇軾「南行前集序」に、「而山川之秀美、風俗之朴陋、賢人君子之遺跡、與凡耳目之所接者、雜然有觸於中、而發於詠歎。」とある。

○環抱

ぐるりと取り囲むこと。用例としては、唐符載「襄陽張端公西園記」に「峴山漢水、環抱里閭。」とある。

○啓景乎神封

「啓」は、ひらくこと。「景」は、優れた景勝の意。「神封」は、神がそこにいるための地の意。ここは、遠石の地を指す。南朝宋 王叔之の「遊羅浮山」詩に「菴靄靈岳、開景神封。」(『藝文類聚』卷七、『古詩類苑』卷一二)とある。

○丹青

画工のこと。三國魏 曹丕「與孟達書」に「故丹青畫其形容、良史載其功勳。」とある。

○景想

慕わしく思うこと。『新唐書』卷一〇二姚思廉伝に「時 思廉 在洛陽、遣使遺物三百段、致書曰、景想節義、故有是贈。」とある。

○潤色

美しく飾ること。『論語』憲問篇に「爲命、裨諶草創之、世叔討論之、行人子羽修飾之、東里子產潤色之。」とある。

○逼真

真実そのままに迫ること。唐 韓愈「春雪間早梅」詩に「那是俱疑似、須知兩逼真。」とある。

○登臨

高きに登って河川(あるいは海)を前にすること。また、遊覧すること。『楚辭』九辯に「慄慄兮若在遠行、登山臨水兮送將歸。」とある。

○萬頃

海や土地が非常に広いこと。ここでは、どこまでも広い海に解釈する。宋 范仲淹「岳陽樓記」に「至若春和景明、波瀾不驚、上下天光、一碧萬頃。」とある。

○有聲之画

詩のこと。画を「無聲詩」というのに対していう。宋 蘇軾「和文與可

洋川園池 溪光亭」詩に「溪光自古無人畫、憑仗新詩與寫成」とあり、宋 施元之注に『古詩話』、詩人以畫爲無聲詩、詩爲有聲畫。」とある。

○紙生毛

紙が毛を生じて筆跡が読み取れないこと。五代 王定保の『唐摭言』卷一〇に「劉魯風投謁所知、爲典謁所阻、因有詩曰、無錢乞與韓知客、名紙生毛不爲通。」とある。

○徒然

空っぽで何もできないさま。南朝梁 任昉「爲范始興作求立太宰碑表」に「瞻彼景山、徒然望慕。」とあり、李周翰注に「言藩府士女、皆積懷素筆、瞻望王之景行、空然思慕、願欲立碑」(『文選』卷三八)とある。

○口囁囁

言葉を発しようとして何も言えないさま。唐 韓愈「送李願歸盤谷序」に「伺候於公卿之門、奔走於形勢之途、足將進而越趨、口將言而囁囁。」(『古文真寶』後集所収)とある。

○嗟歎

感嘆すること。感嘆して声を上げるが本来の意味であるが、上の「口囁囁」に照らして「感嘆する」の意に解釈する。『毛詩』大序に「言之不足、故嗟歎之。」とある。

*以上、遠石への賛美を述べてまとめとする。

○寶永二龍集

宝永二年。西暦一七〇四年。「龍集」は、歳次のこと。「龍」は、木星。「集」は、宿るの意。木星が、一年に十二次の一次だけ移動することから、一年を「龍集」という。

○江元次

毛利元次。毛利氏の祖は、大江匡房であるので「江」姓を名乗る。